

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】 山本 成生

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院人文社会系研究科

【研究題目】 西洋中世・ルネサンス期における音楽家の社会的身分とその組織構造

【研究の目的】

本研究は、9世紀から16世紀にかけてのヨーロッパ世界における「音楽家」のあり方を解明せんとするものである。助成期間中は、とりわけ「奏楽天使」と呼ばれる図像表現の検討を行った。

【研究の内容・方法】

「奏楽天使 angel musician」とは、様々な楽器を手に持ち、また合唱を行っている天使たちを表す図像表現である。これらの図像は、中世後期(14～15世紀)の絵画や彫刻、装飾写本等に頻出するが、音楽史研究、美術史研究の双方において、十分に検討されているとは言い難い。すなわち、美術史研究においては「オルガン＝教会音楽」というような「楽器」の象徴的意味の指摘に留まり、また音楽史研究では失われた楽器の復元をその目的とする楽器学的関心に終始している嫌いがあるのである。それらに対し、本研究は「奏楽天使」には当時において何らかのより重要な意義が存在したと仮定し、学際的な視点から検討を行った。

【結論・考察】

その内容は、次の二点に要約できる。

1) 中世キリスト教会は、礼拝における「楽器」を禁じていた。それにも関わらず、「神の歌」を担う天使たちが多様な楽器を有していたのは何故か。これは聖書解釈学の伝統が影響している。初期教会の教父たちは、旧約聖書の中に彼らが嫌悪する「楽器」が数多く言及されていることに当惑した。そこで彼らは、それら「楽器」をひたすら寓意的(アレゴリカル)に解釈することで、神学的矛盾を解消しようとする。すなわち、シンバルは「二つの異質な存在が一致するもの」であり、オルガンは「異なる様々な人間(=パイプ)が、大いなる神の一つの意志(=メロディー)を表すもの」とされた。そして、中世後期になると「人がそうした寓意的な意味を理解し得る限りにおいて、現実における楽器の音楽すら許容される」とまで、「楽器」は教会の価値観に浸食しつつあった。「奏楽天使」たち楽器を携えている理由は無論これのみではないが、このことから、「奏楽天使」の図像表現には、単純な象徴性を超えた高度な寓意性が含まれていたことが窺える。

2) 西洋中世の人々は、神や聖人がいる「天上」世界と自分たちが存在する「地上」という、二元的世界観を有していた。これを踏まえると、当時における「奏楽天使」の意義がより一層あきらかになる。すなわち、地上における教会音楽は、聖書において描かれる「神の御もとで天使たちが奏でる讃歌」を人間が模したものである。その一方で、当時の神学は「天使が人間を模倣する」ことも認めており、「天上」と「地上」の関係性は決して一方通行ではなく、相互的なものであったといえる。そして、この両者の関係を可視化する「インターフェース」の役割を担っていたのが「奏楽天使」だったのである。

以上の見解は、日本音楽学会第62回大会(2011年11月6日・於:東京大学)で口頭報告を行った。また、その内容は『西洋中世研究』第4号(2012年)にて、論文として刊行される予定である。